

使用者のかいらい候補を落選させよう！

11月11日、過半数代表選挙が行われます。京大で働くすべての労働者の代表を選ぶ、大事な選挙です。

今回の立候補者は二人。ユニオンエクスタシーは残念ながら候補者を出せませんでした。が、どちらがより労働者の代表としてふさわしいのか、そして非正規労働者の利益のために大学と交渉してくれるのか、注目しています。

とはいえ、投票のための情報が不足しては、公正な選挙は望めません。そこで、公開質問状を作成し、お二人に突撃インタビューを試みました。

※過半数代表とは？

事業所の労働者代表として、労使協定を締結したり、就業規則に意見を述べたりします。時間外労働・休日労働を行うためには、使用者と過半数代表とが「36（サブロク）協定」を結ぶ必要があります。

11/11労働者過半数代表選挙

公開質問状

(1) 5年条項についてどう思いますか。

(2) 当組合は、5年条項の完全撤廃を要求していますが、過半数代表者としてこの問題にどう取り組みますか。

(3) 正規/非正規の均等待遇が必要だと思えますか。

(4) 均等待遇を実現するためには、何が必要だと思えますか。

(5) 当組合は、男女共同参画推進アクションプランに非常勤職員の問題を盛りこむよう要求しています。多くの女性が「非常勤」という低賃金で不安定な状況におかれていることについて、どう思いますか。

足立芳宏候補 (農学研究科准教授)

5年条項については、撤廃が望ましいという立場。制度が恣意的で、上司の顔色をうかがう現場の非常勤職員はとてつらそうだ。

5年条項の問題点は、解雇の理由を言わなくても辞めてもらえるというシステムにある。雇用する側の恣意が働きやすい。大学は経営第一主義で、切りたい時に切れる体制をとるので、そこをどうやって崩していくかだ。運動でやるしかない。

均等待遇は一般的には必要だと思う。なかなか難しいが、社会のフラストレーションを解消するためにも、雇用の安定性をきちんと保障しないといけない。時間雇用の問題は、ぶっちゃけ超過勤務の話よりも深刻だと思う。そこに全体のしわ寄せがいつていることは間違いない。

抱負としては、「働く人の権利を主張する」ということ。過半数代表は、京大の教職員が自立的に大学に対して主張してるかどうか、そういう意志があるかどうかという試金石。それをちゃんと取るということは、その意志を持っていることを示すという、シンボリックな要素がいちばん強いと考えている。

「ぼくも長い間オーバードクターで、非常勤で月15万で生活していた」と語る足立候補。均等待遇を実現するために、「正規の賃金を非正規に回すべきか」という論点では意見が分かれました。しかし、現在の賃金制度が、家族を扶養する男性正職員中心に作られていること、女性非常勤が「主婦パートの仕事」として低い待遇に置かれてきたことについては、見解を共有できました。



荒谷裕美候補 (生命科学研究所総務掛長)

事前に電話でインタビューを申し入れたところ、「自分の色を出すのがいいのかわからない」「個人で答えていいか検討させてほしい」とのことでしたが、翌日訪ねた際には、やはり質問には回答できないとのことでした。

立候補の理由について、「労働者の多くの意見を大学に届けるため」「投票率を上げなければいけない」などと話して頂きましたが、何か漠然とした感じをぬぐえませんでした。

非常勤の待遇改善については、「個人の見解」と前置きされた上で、「若干名だが正職員に転換するための登用試験もあり、どうしても非常勤が嫌なら試験にトライされるのは普通の話かなと思う」との発言がありました。

また、「『交渉』ではなく、労働者の声を大学に届ける立場。対立することだけが大事ではない。お互い良い職場を作るために協力していくべきである」と強調していました。

過半数代表は、労働者の代表であるはず。荒谷候補が、まるで使用者の見解を代弁するような発言することに、大きな違和感を覚えました。これでは、総務部(岸本佳典総務部長)が擁立した「かいらい候補」であると思われても仕方ないのではないのでしょうか。

写真なし